

乃木希典「金州城下作」と唐代詩文

——付、歌曲「花」・唱歌「仰げば尊し」と古典——

丹羽博之

要旨

第一章では、乃木希典「金州城下作」と唐代の李華の「甲古戰場」の用語・表現の類似を指摘し、乃木は『古文真宝集』などに収められている名文を参考にして作詩したことを考察。第二章では、武島羽衣作詞「花」の二番の歌詞は『源氏物語』『源重之集』の和歌を利用したものであることを指摘。また、「見ずや」の表現は漢詩の樂府体の詩に多く見られる表現を応用したことを指摘。第三章では、「仰げば尊し」の歌詞も『孝経』や『論語』の文章を下敷きに行っていることを指摘。

キーワード：乃木希典 武島羽衣 日本漢詩

二〇〇四年は日露戦争百年目の年ということで、色々と取りざたされている。私が少年時代を送った一九六〇年代と雖も、ふとんの中で祖母の語るお伽噺には、乃木大将の話や死んでも喇叭を放さなかつた兵士の物語があつた。幼いときに聞いた音楽や物語は一度脳裏に入るとなかなか抜けないというが、戦後の平和教育を受けた世代にも戦前の軍国美談等は生き続けている。本稿では明治期の作品と漢詩文との関わりを考察する。

一、「金州城下作」

先ず、この度気の付いた乃木希典「金州城下作」の詩を挙げる。

山川草木転荒涼 山川草木 転た荒涼
十里風腥新戰場 十里風腥し 新戰場
征馬不前人不語 征馬前まず 人語らず
金州城外立斜陽 金州城外 斜陽に立つ

戦前の教育を受けた人でこの詩を知らぬ人はあるまい。しかし、乃木希典の様々の逸話、美談は戦後教育からは姿を消し、今やこの詩を知る人も少ない。大学の講義でも明治の人が漢詩を作った事を話すと、驚く学生が多い。この詩の「山川草木。転荒涼、十里風腥。新戰場」は杜甫の名高い「三更三別」の一首「垂老別」の「積屍草木腥、流血川原丹」等の表現を下敷きにしたであろう事は、先に述べた（「軍歌と漢詩（其二）」 大手前大学人文科学論集 第二号 二〇〇二年三月）。二〇〇三年、勤務先の大学院の授業でこの詩を紹介すると、台湾からの留学生の李恒全君が「山川震眩」「征馬踟蹰」の表現が中国の古典にあると教えてくれた。後日それは、唐の李賀の「甲古戰場」という、『古文真宝』、『続文章規範』にも収められている大変有名な文である事が判明した。ところが、乃木の詩と「甲古戰場」との関係については、石川忠久氏が已に指摘されていた（『私の漢詩講義』大修館書店 二〇〇二年四月）。

石川氏の驥尾に付して、両者の分析を加えてみる。同書では、「甲古戰場」の一部の

主客相搏、山川震眩。声拆江河、勢崩雷電。至若窮陰凝閉、凜冽海隅、積雪没脛、堅冰在鬚、鷺鳥休巢、征馬踟蹰。繪纈無温、墮指裂膚。当此苦寒、天仮強胡。

主客相い搏ちて、山川震眩す。声は江河を拆き、勢いは雷電を崩す。窮陰凝閉して、海隅に凜冽たるが如きに至りては、積雪脛を没し、堅氷鬚に在り、鷲鳥巢に休み、征馬も踟蹰す。繪續温無く、指を墮とし膚を裂く。此の苦寒に当たりて、天強胡に仮す。を挙げて、「古戦場」と「新戦場」、「山川」、「征馬」等の詩句の類似を指摘された。石川氏は更に、征馬に關しては更に韓愈の有名な七律「左遷至藍関示姪孫湘」の「雪擁藍関馬不前」も挙げられていたが、李恒全君もこの韓愈の例を知っていて、私に教えてくれた。国も違い、年もかなり違ふ二人の漢詩の造詣の深さに胸を打たれた。

「弔古戦場」を読むと、石川氏の指摘以外にも、乃木の詩と共通する箇所がある。

河水縈帶、群山糾紛。黯兮慘悴、風悲日曛。 河水縈帶し、群山糾紛す。黯として慘悴し、風悲しみ日曛る。「弔古戦場」

十里風腥新戰場 金州城外立斜陽 「金州城下作」

。を付した箇所の類似や、多くの血を吸った戦場は寂として、人も鳥獸も声を立てないことを共に、

鳥無声兮山寂寂、夜正長兮風淅淅。 鳥は声無くして 山は寂寂たり、夜は正に長くして 風は淅淅たり。「弔古戦場」

征馬不前人不語 「金州城下作」

と描写する。更に、「弔古戦場」には、

嗚呼噫嘻、吾想夫北風振漠、胡兵伺便。主將驕敵、旗門受戰。 嗚呼噫嘻、吾想ふに、夫れ北風漠に振ひ、胡兵便を伺ふ。主將敵

乃木希典「金州城下作」と唐代詩文——付歌曲「花」唱歌「仰げば尊し」と古典——

を驕り、旗門戦を受く。

と、主将が敵を侮り、驕っていたために苦戦した事を述べる。これは、南山攻略における日本陸軍首脳の判断と類似しているように思える。当初南山の戦死傷者数の報告を受けて、大本営ではゼロが一つ多いのではないかと疑ったという。また、乃木の第三軍も、日清戦争時一日で陥した経験から旅順攻略を甘く見ていたふしもある。李華と乃木との間には約千年の時があるが、時空を超えて戦争の真理は存するらしい。後のミッドウェイ、ガタルカナル等での敵を甘く見た結果の日本軍の敗北をも想起させる。

この段の「夫れ北風漠に振ひ、胡兵便を伺ふ。」という中国北方異民族の侵略の歴史と、露西亞帝国の南下政策に類似性を感じた明治人もいたのではないか。「甲古戦場」は当時よく読まれていたようで、土井晩翠「星落秋風五丈原」の「心を焦し身をつくす、暴露のつとめ幾とせか」の詩句は、「万里奔走し、連年、露に暴さる」（「甲古戦場」）のイメージという（松浦友久『詩歌三國志』新潮選書）。

「甲古戦場」は乃木も利用したが、この文の「墮指裂膚」の表現は、明治唱歌の hands、大和田建樹の「あわれの少女」の「吹き捲く風は顔を裂き」や軍歌「独立守備隊の歌」（土井晩翠作詞）の「炎熱鉄をとかす日も 氷雪肌を裂く夜半も」、「朝鮮国境守備の歌」（旧朝鮮国境守備隊作詞）の「太刀はく肌は裂くるとも 銃執る双手はおつるとも」に影響を与えている（拙稿「明治唱歌『あわれの少女』に見る和洋中折衷の文化」『東アジア比較文化研究』2 二〇〇三年九月）。更に乃木の脳裏には「山川草木悉皆成仏」の仏語もあつたかもしれない。

「立斜陽」の詩句は、「寒泉」の検索によると、唐詩には二例見えるが乃木の詩との類似は認められない。しかし、「立斜陽」の詩句は、宋の詩人王禹稱の詩「村行」にも見える。

馬穿山径菊初黄 馬山径を穿ち 菊初めて黄なり

信馬悠悠野興長 馬に信せて悠悠 野興長し

万壑有声含晚籟 万壑声有り 晚籟を含み

数峯無語立斜陽 数峯語無く 斜陽に立つ

棠梨葉落胭脂色 棠梨葉落ち 胭脂の色

蕎麦花開白雲香

蕎麦花開き 白雲香し

何事吟余忽惆悵

何事ぞ吟余 忽ち惆悵す

村橋原樹是吾郷

村橋原樹 是れ吾が郷

「立斜陽」の表現以外にも「数峯無語」と「人不語」が類似しており、馬も登場する。但し、詩興は全く別のものであり、単に似ているということであろうか。

二 「花」(武島羽衣作詞・瀧廉太郎作曲)の古典世界

花

武島羽衣作詞

瀧廉太郎作曲

春のうららの隅田川

のぼりくだりの船人が

權のしずくも花と散る

眺めを何に喩ふべき

見ずやあけぼの露浴びて

われにも言う桜木を

見ずや夕暮れ手をのべて

われさしまねく青柳を

錦織りなす長堤に 暮るればのぼるおぼろ月

げに一刻も千金の 眺めを何に喩うべき

乃木希典「金州城下作」と唐代詩文——付歌曲「花」唱歌「仰げば尊し」と古典——

芸術的な歌曲の第一号としてあまりにも有名な歌である。同じ、武島作詞、瀧廉太郎作曲の「箱根八里」の歌詞にも漢詩の影響は濃厚であるが、この「花」の歌詞にも和漢の作品が下敷きにされている。

一番の歌詞の「花と散る」と

我のみや世をうくひすと鳴きわびん人のこころの花とちりなば

〔古今和歌集〕恋五・七九八・読み人しらず 「小町集」92

今更に妹にあはめや春霞たなびく野辺の花とちりなん

〔古今和歌六帖〕第五・三〇八六・わぎもこ・みつね

万朶の桜か襟の色 花は吉野に乱れ咲く 大和男の子と生まれなば 散兵線の花と散れ

「歩兵の歌」

咲いた花なら散るのは覚悟

「同期の桜」

等の和歌や軍歌に見える表現とを『国歌大観』などで調べている時に、『源氏物語』の次の歌と「花」との歌詞の類似性に気づいた。

春のうららの隅田川 のぼりくだりの船人が

權のしずくも花と散る 眺めを何に喩ふべき

春の日のうららにさいてゆく舟は棹の雫も花ぞちりける

(『源氏物語』・胡蝶・女房の作)

「春のうららの」「舟、棹・櫂の雫」「花と散る」が「花」の歌詞ときわめて類似している。武島羽衣は、『日本の唱歌 上』(金田一春彦・安西冬子・講談社文庫)によると、

武島羽衣(一八七二—一九六七)。国文学者・歌人・詩人。(中略)明治二十九年、東大の国文科を卒業。学生時代から詩に秀で友人の高山樗牛・大町桂月・塩井雨江らとともに、美文の作者として名をなしたが、のちに歌人に転じ、御歌所の寄人を命じられた。(中略)作詞ではこの「花」のほか、「美しき天然」が有名。文部省唱歌の中にも作があるはずであるが、今はどれがそうか不明。

とあり、「花」を作詞するにあたって、『源氏物語』の和歌を粉本としたことは間違いないであろう。武島の他の美文の背景にも、和漢の古典の素養があつたに違いない。

このことは、小生の新発見として、二〇〇四年度の勤務先の授業で話した。ところが、その一週間後、吹浦忠正氏の著書『歌い継ぎたい日本の心 愛唱歌 とっておきの話』(海竜社・二〇〇三年四月)に、田辺聖子氏からの手紙で「花」の歌詞は『源氏物語』(胡蝶)からの本歌取りであることが紹介されていたのを知った。後日、学生には「先即制人、後則為人所制(先んずれば即ち人を制し、後るれば則ち人の制する所と為る)」「(『史記』)、「学不思則罔、思不学则殆(学びて思はざれば則ち罔し、思ひて学ばざれば則ち殆し)」「(『論語』)の好例として紹介した。

「われにも言う桜木を」の表現と、『史記』「桃李不言、下自成蹊。(桃李言はざれど、下自ら蹊を成す)」「(李広伝)との関係を調べているうちに、

おむなのいへに、もものはなやすもはなやなどむらむらさきたり、うぐひすなく

82 うぐひすの声に呼ばれてうち来ればものはぬ花も人まねきけり

乃木希典「金州城下作」と唐代詩文——付歌曲「花」唱歌「仰げば尊し」と古典——

「重之集」(新編『国歌大観』・『夫木和歌抄』にも入集)

の歌に気づいた。この和歌の下の句から

ものいはぬ花↓われにも言う桜木
人まねきけり↓われさしまねく青柳

の歌詞が作られたことは明らかであろう。源重之は小倉百人一首の「風をいたみ岩打つ波のおのれのみ碎けて物を思ふころかな」の歌で有名な歌人である。この重之の歌は勅撰和歌集に収められておらず、特に有名な歌ではないが、それをうまく利用した武島の力量はみごとである。有名な歌でない分、「花」の歌詞に影響を与えたことには気づかれなかったであろう。

その昔、平安朝和歌の研究に志し、「曾丹集」や「重之集」を繰返し読んでいた頃は全く気づかなかったが、二十数後年に、重之集の歌が唱歌「花」に利用されていることを初めて知った。なお、重之の和歌は、『源重之集・子の僧の集・重之女集全釈』(目加田さくを・風間書院・一九八八年九月)には、言及が無いが、この和歌は先に挙げた『史記』を踏まえていることは言うまでもない。平安時代にも「桃李不言」は、人口に膾炙しており、『和漢朗詠集』にも認められる。

夜の雨ひそ儼かに湿して 曾波そうはの眼新たに媚びたり

暁の風あけ緩く吹いて 不言の口先づ咲めり

桃始めて華はなさく序 紀

(『和漢朗詠集』三月三日付桃)

は、その一例。なお、ここでは桃の華を美人に喩えている。

「もの言う花」等を『日本国語大辞典』(旧版)で調べると、

もの言う花

物の意味を解し、口をきく花の意で、美人の称。解語の花。浮世草子・男色大鑑一八・三「是ぞ今の世の色づくし物いふ花山に入る、春の世のなれば枕」(中略)当世書生氣質〈坪内逍遙〉「鉄石の勉強心も変わるならひの飛鳥山に物いふ花を見る書生の運動会」

もの言わぬ花

美人を「物言う花」というのに対して、草木の花の称。(前掲重之集の例)浮世草子・風流曲三味線一・一「物いはぬ花もをかしからず、紅葉が赤いとて酒の相手にもならず」

とある。先ず、「もの言わぬ花」の語ができ、解語の花などから、「もの言う花」が造語されたのであろう。なお、解語の花は、唐の玄宗が楊貴妃を解語花と称した事に基づく(『開元天宝遺事』)。

「見ずや」という表現も「聞かずや」とともに楽府などの歌謡を伴った漢詩に屢々用いられ、「注意をうながす」(吉川幸次郎『杜甫詩注』)言い方である。

不見連理枝 異根同條起 見ずや連理の枝 根を異にするも條を同じくして起つを

子夜歌「歎愁儂亦慘」

君不聞漢家山東二百州 千村万落生荆杞 君聞かずや 漢家山東二百州 千村万落荆杞を生ずと

君不見青海頭 古来白骨無人收 君見ずや青海の頭 古来の白骨 人の収むる無く

杜甫「兵車行」

君不見昔時呂尚美人賦 又不見今日上陽白髮賦 君見ずや 昔時呂尚が美人の賦を 又た見ずや 今日上陽白髮の賦を

白樂天「上陽白髮人」(0131)

君不聞開元宰相宋開府 不賞辺功防驥武、又不聞天宝宰相楊国忠、欲求恩幸立辺功、君聞かずや 開元の宰相宋開府 辺功を賞せずして武を驥すを防ぐを、又た聞かずや 天宝の宰相楊国忠、恩幸を求めんと欲して辺功を立て、

同「新豊折臂翁」(0133)

杜甫、白樂天は、二句セットになって使われているが、「花」も「見ずやあけぼの」「見ずや夕暮れ」と繰り返して用いられ対句仕立てになっている。前掲の漢詩は歌謡をともなったものであり、歌曲「花」の性格にも近い。

さらに、三番の歌詞の錦を花にたとえるのも漢詩の表現に倣ったものである(蔵中スミ氏『歌人素性の研究』第二章素性の和歌 第二節 当代漢詩との交渉・桜楓社)。蔵中氏は素性の

見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける

の歌に見える「春の錦」の例を漢詩の表現に求められている。さらに、この歌の「柳桜」は「花」の二番の歌詞の「われにもものいふ桜木」「われさしまねく青柳」に利用されているのではないか。

『日本国語大辞典』(旧版)の「青柳」の項には

青柳 料理茶屋の名。近世、文化の頃から明治初年まで、江戸両国の駒留橋付近にあった。洒落本・青楼松の裡「尚左堂の会をしまつて、それから青柳(アオヤギ)でのもので、こけへくるまで」

とある。桜木に美人(遊女)、青柳に隅田川畔の料理茶屋を隠し、所謂花柳界を連想させる趣向になっているとも解せる。漢詩に於いては、名花は名妓でもあった(「蓼の花と名妓(蓼花)」『一海知義の漢詩道場』岩波書店 二〇〇四年三月)。花見のあとには花柳界へくりだすこともあったのかもしれない。

一、二番の歌詞は、日本の古典の利用が濃厚であるが、三番の歌詞の「げに一刻も千金の眺め」や「くるればのぼるおぼる月」は、蘇東坡の「春夜」の「春宵一刻直千金、花有清香月有陰(春宵一刻直千金、花に清香有り 月に陰有り)」を下敷きにして作られたのは、明ら

かであろう。一番の歌詞は『源氏物語』という日本古典から取り、二番は和歌・漢詩双方の表現を利用し、三番の歌詞は中国古典から採るといふ和漢の先行作品の受容が認められる。和漢の古典を吸収し、明治の文語文として美しい歌詞に織り上げた武鳥羽衣の技量は見事である。しかし、そのメロディは西洋音楽を基にして作曲されたものである。

「螢の光」、「故郷の空」等の明治唱歌の多くが西洋のメロディに無理に日本語の歌詞を当て嵌めて歌っていた時も、その歌詞には明治人に深く培われた漢詩の表現が利用された(前掲丹羽論文)。漸く日本人の手で本格的な歌曲が作られたが、その歌詞には和漢の多くの古典が下地になっている。作詞の場合は新しい日本語の表現を模索していた時代であり、和漢の古典にその手本を求めることは自然な成り行きであった。作曲の場合はその範とするべき音曲が無く、瀧廉太郎の苦心も思いやられる。瀧廉太郎の一見洋楽風と見える新しい歌曲にも邦楽から影響を受けた箇所もあると思うのであるが、文学研究家の手に余るテーマであり、専門家の言を待ちたい(或いは已にそうしたことは音楽研究者によって進められているのかも知れない)。

三「あおげば尊し」と「身体髪膚受之父母」

身体髪膚受之父母 不敢毀傷孝之始也。 身体髪膚 之を父母に受く、敢へて毀傷せざるは孝の始めなり。(『孝経』開宗明義)

立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也。 身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ、以て父母を顯はすは、孝の終りなり。

(『孝経』開宗明義)

古い教育を受けた世代には、人口に膾炙した「身体髪膚受之父母」。親孝行の第一歩は恙なく生きること、今の世にも通じる至言と思うのだが、最近では漢文軽視の風潮もあってか耳にすることも少なくなった。おっちょこちょいで怪我ばかりしている子を持つ親にとっては、子を持って知る親心である。

ふとしたことから、『孝経』の「立身行道、揚名於後世」から「あおげば尊し」の「身を立て 名をあげ」の歌詞が生まれたことに気づ

いた。「あおげば尊し」の歌詞は、

あおげば尊し 我が師の恩

教えの庭にも 早幾年

思えば いと疾し、この年月

今こそ 別れめ いざさらば

互いにむつみし 日ごろの恩

別るる後にも、やよ 忘るな

身を立て 名をあげ、やよ、はげめよ

今こそ 別れめ、 いざさらば

朝夕 馴れにし、まなびの窓。

蛍のともし火、積む白雪

忘るる 間ぞなき ゆく年月

今こそ 別れめ、 いざさらば

とある。このことをいつか書こうと思っていると、已に読売新聞文化部『唱歌・童謡ものがたり』（岩波書店 一九九九年刊・浅見恭弘執筆）に「仰げば尊し」の歌詞は『孝経』を利用してという指摘があった。同書には、

歌詞は、二番の「身を立て名をあげ」を、中国の古典「孝経」を引き、「身を立て、名をあげ」に直すなど、いくつかの変更点があっ

た。

たたき台となった元詞の作者は不明だが、だれが書いたとしても、合議によって完成したことに変わりない。「リーダー格は稲垣千穎（『蝶々』の二番などを作詞か）。内容が『螢の光』と対になっているのは、伊沢修二が稲垣らの学者に依頼して、そう作らせたのかもしれない」

最大の謎は、曲がどうやって出来たか、である。

曲調は外国風だ。八分の六拍子で、長調だが、「ド」や「ソ」でなく、「ミ」で始まるメランコリックな旋律を作るのは、当時の日本人には難しい。同じ「小学唱歌集」には、スコットランド民謡などの外国曲が多数収められている。それらの中には日本語のアクセントと旋律がうまく合わないものもある。

『仰げば……』の場合は、それがぴったりマッチしている。歌詞が出来た後に曲を新作したようにも聞こえ、何とも不思議なのだ。とある。『孝経』引用のことは、さりげなく書かれているが、執筆者浅見氏の新発見なのであろうか。或いは已にどなたかが発表されているのであろうか。

小学生のころ、この歌を卒業式で歌いながら、何故「おしへの庭」なのか不思議に思った記憶がある。教室で習うのであるから、「学び舎」ではないのかと。校庭では主に体育を習ったのにと。この疑問も大学で日中の古典を学んで氷解した。「教への庭」は、『論語』（季氏）の有名な「庭訓」の故事に基づく。

鯉趨而過庭、曰、学詩乎、対曰、未也、不学詩、無以言、鯉退而学詩。 鯉趨りて庭を過ぐ、曰はく、詩を学びたる乎と、対へて曰

はく、未だしと、詩を学ばざれば、以て言ふ無しと、鯉退きて詩を学ぶ。 （鯉は孔子の息子の名）

この故事から「庭訓」は、次のような意味を持つ。

家庭の教育。孔子の子の鯉が庭を足早に通り過ぎたとき、孔子が呼びとめて、詩や例を学ぶように教えた故事に基づく。家教。

（『新字源』）

この庭訓の故事から、本朝の『庭訓往来』『夜鶴庭訓抄』等が生まれ、『論語』の日本への影響力の強さを物語っている。三番の歌詞が「螢

の光」と同様に、『蒙求』などに見える蜚雪の功を利用していることは言うまでもない。

付記

二〇〇三年十二月五日、旅順・二〇三高地を訪れた。旅順港側から見ると今は樹木におおわれた何の変哲も無い小高い丘で、正しく高地であった。乃木希典の「爾靈山」の詩に「万人斉仰爾靈山（万人斉しく仰ぐ爾靈山）」とあったので、どんなに高い山かと思っていたが意外となだらかな丘陵であった。こんな平凡な高地を奪うために何万もの犠牲者を出したかと思おうと拍子抜けがした。山頂には今も爾靈山の忠魂塔が立ち、数人の年配の日本人観光客が記念写真を撮っていた。日本人観光客以外は誰一人おらず、戦前の教育を受け、「水師営の会見」を歌った古希を過ぎた老人たちの懐旧の観光スポットとなっているようだった。

ここからは旅順港が一望でき、確かに戦略上の重要な高地であることは理解できた。目を反対側にやると、日本軍が攻め上った側はさすがに急峻で、ここをよじ登るのはさぞかし、苦しかったであろうことは容易に想像できた。当日は快晴であったが、吹き来る風は肌を刺し、これが雨雪を伴った日にはどんなに寒かろうかと日露の将兵たちの苦労が偲ばれた。戦史を繙けば、二〇三高地占領は、一九〇四年十二月五日午後一時という。時計は恰も十二時を廻り、九十九年前のちょうどこの頃は、日露最後の激戦が交わされ、「鉄血覆山山形改（鉄血山を覆ひ、山形を改む）」（乃木希典「爾靈山」）状況だったのだろう。

露西亞帝国の東方経営、南下政策の一環として、大連・旅順は開発され、日露戦後は大日本帝国大陸進出の基地として、鉄道・病院などのインフラが整備されていた。第二次世界大戦後は、元の中国に返還されたが、それまでの中国の人々の苦難の歴史はいかばかりであったろうか。水師営会見所は今も残り、多くの日本人観光客を集めていたが、そこには、日清・日露戦争時に虐殺された中国人の写真もあった。旅順攻略戦では日露数万にのぼる戦死傷者を出したが、一番の被害者は現地の住民であろう。勝手に自国の土地に入ってきた日露の軍隊によって、多くの無辜の民は犠牲になった。

しかし、改革開放後の旅順は今や観光の人気コースとして定着し、日本人観光客の落とす外貨で地元の人々は潤っている。二百三高地山頂登り口には、駕籠かきが居て、一人百円ほどの料金を取っていた。横で見ていると、駕籠の持ち主と雇用人がいるようで、資本家と労働

者の搾取・被搾取の原型を見る思いがした。ただ、旅順観光も日本の戦前に生を受けた人々でもっているようで、欧米の人には当然ながら
人気が無く、戦後生まれの日本人はあまり訪れないようだ。